「福島の石橋群」
土木学会選奨土木遺産認定記念シンポジウム

石橋群が紡ぐ 歴史・ひと・地域

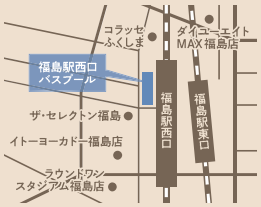
2023 11/18(土) 19(日)

参加費 ／ 無料

現地見学会 / 11月18日(土)

集合 13：00
解散 16：00（予定）

松川橋ほか６橋を回ります。
福島駅西口バスプール
集合・解散

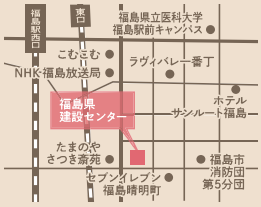


行程　松川橋 → 広表のめがね橋 → 大桂寺の石橋 → 旧壁沢川石橋 → 甚念坊山２号橋 → 旧祓川橋

シンポジウム / 11月19日(日)

開場 12：30
開会 13：15　閉会 16：00

福島県建設センター２階
大会議室
（福島市五月町４番25号）



※現地開催とオンライン配信を組み合わせたハイブリッド開催となります。
※駐車台数には限りがありますので、できるだけ公共交通機関でお越しください。

オンライン配信サイト
（ライブ配信）
開催日時以降ご覧になれます

基調講演

「近代土木遺産の技術的及び歴史的価値」

講師　知野 泰明 氏
（日本大学工学部准教授）

主催 / 福島の石橋群保存会　共催 / 福島市、二本松市、川俣町

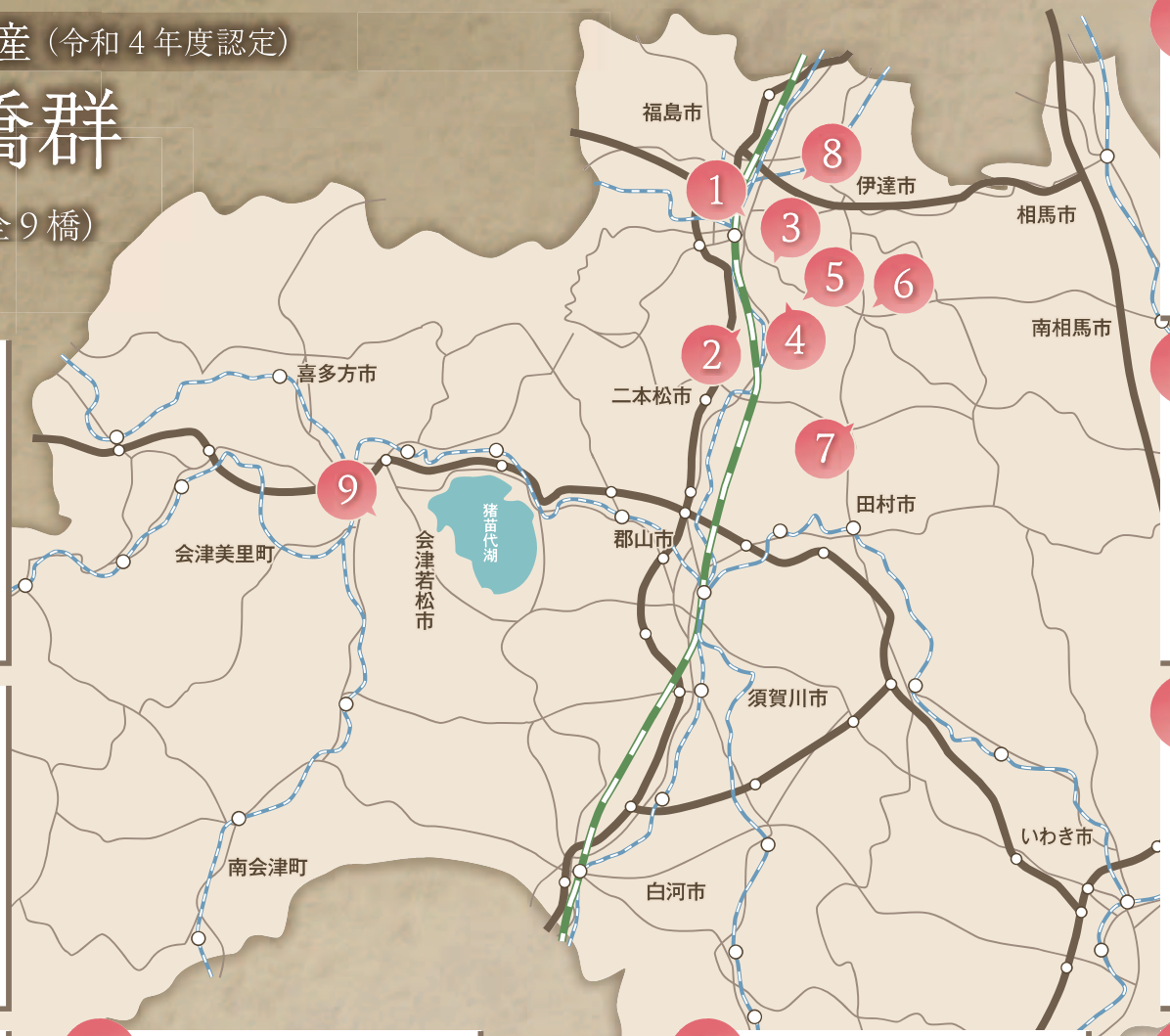
協　賛　（一社）東北地域づくり協会、（一社）福島県建設業協会、（一社）福島県測量設計業協会、福島県橋友会、松川町観光協会、飯野町観光協会

後　援　国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所、福島県県北地方振興局、（公社）土木学会東北支部、東根堰土地改良区、戸の口堰土地改良区、日本の石橋を守る会、東北街道会議、歴史の道土木遺産万世大路保存会、ふくしまけん街道交流会、㈱福島民報社、福島民友新聞㈱、㈱福島建設工業新聞社、NHK 福島放送局、福島テレビ㈱、㈱福島中央テレビ、㈱福島放送、㈱テレビユー福島、㈱ラジオ福島、㈱エフエム福島

令和５年度福島県地域創生総合支援事業（サポート事業）補助対象事業

土木学会選奨土木遺産（令和４年度認定）

福島の石橋群 認定箇所（全９橋）



1 旧祓川橋

●所在地
福島市太子堂（信夫山公園内）

2 松川橋

●所在地
福島市松川町（福島市道）

3 甚念坊山２号橋

●所在地
福島市渡利（福島市道）

4 広表のめがね橋

●所在地
福島市飯野町（福島市道）

5 大桂寺の石橋

●所在地
福島市飯野町（大桂寺参道）

6 旧壁沢川石橋

●所在地
伊達郡川俣町飯坂（機織神社御前堂跡）

7 明道橋

●所在地
二本松市東新殿（二本松市道）

8 東根堰水路橋

●所在地
伊達市保原町（東根堰用水路）

9 不動川水管橋

●所在地
会津若松市一箕町（戸ノ口堰用水路）

1 旧祓川橋（きゅうはらいかわばし）

- 所在地／福島市太子堂（信夫山公園内）
- 架橋年／安永年間（1772～1781）、寛政２年（1790）、享和３年（1803）、明治18年頃等諸説あり
- 管理者／福島市
- 橋長・幅員／ L=8.5m、W=3.4m、アーチ径間 5.5m、アーチ高2.0m
- 沿革

　信夫山の羽黒神社参道入り口の祓川に架橋されていたが、昭和45年に信夫山公園内に移設された。昭和48年に福島市指定の有形文化財に指定されている。

　信夫橋と松川橋に共通する特徴が見られ、信夫橋の橋脚部同様に鶴と亀が要石に掘られるなど、両橋との技術的共通性が多い。

2 松川橋（まつかわばし）

- 所在地／福島市松川町（福島市道）
- 架橋年／明治18年（1885）
- 管理者／福島市
- 橋長・幅員／ L=15,4m、W=5.6m、アーチ径間9.6m、アーチ高2.9m
- 沿革

　明治17年に信夫橋が13連眼鏡橋に架替えられることを知った松川村が要望を行い、県知事の三島通庸は建設費の地元負担を条件に建設を許可した。

　石職人は信夫橋にも関わった三春町の松本亀吉や、川俣町の布野兄弟などが参加した。

　昭和40年に水原川の改修により撤去される予定であったが地元の要望により残された。

　現在も路線バスが走る現役の車道橋である。

3 甚念坊山２号橋（じんねんぼうやまごうきょう）

- 所在地／福島市渡利（福島市道）
- 架橋年／明治18年（1885）
- 管理者／福島市
- 橋長・幅員／ L=7.2m、W=4.6m、アーチ径間5.4m、アーチ高2.6m
- 沿革

　本橋は明治十八年に、県と沿線町村の負担により実施された阿武隈川沿いの富岡街道（現在の国道114号）整備の際に架橋。その後昭和14年に竣工した東北電力信夫発電所工事により街道は山側に付け替えられ、本橋は工事用道路として活用された後に市道に移管された。

　現在はコンクリートの地覆でかさ上げされ、荷重制限はあるが車道橋として現在も使用。

　架設年次等は不明であるが、壁石の構造等は松川橋と類似しており関連が示唆される。

4 広表のめがね橋（ひろおもてのめがねばし）

- 所在地／福島市飯野町（福島市道）
- 架橋年／不明（明治15年以前と推定）
- 管理者／福島市
- 橋長・幅員／L=5.5m、W=5.3m（架設時1.8m）
  アーチ径間2.5m, アーチ高1.4m
- 沿革
  阿武隈川に逢隈橋（現在の３代前）が架橋後、明治時代初期に郡道として整備された新橋街道に、明治15年ごろに整備されたと推定される。
  その後、道路整備により両側が拡幅され、現在もバス路線として現役で活躍する。
  下流（布積み）と上流（谷積み）で石の積み方が違う。上流は空積み、下流はモルタル使用の練積みでありどちらも元の橋を拡幅した際に積まれた石積で、残念ながら建設当時の壁石は見ることができない。

5 大桂寺の石橋（だいけいじのいしばし）

- 所在地／福島市飯野町（大桂寺参道）
- 架橋年／安永７年（1778）
- 管理者／大桂寺
- 橋長・幅員／三径間桁橋、L＝7.8m（3.0@1＋2.4m@2）、W＝1.8m（地覆内側1.3m）
- 沿革
  石橋供養塔によれば、安永７年に信州高遠藩の石工である花井染右衛門たちにより造られたが、昭和44年頃に女神川の河川改修により撤去され、現在の場所（大桂寺参道）に移築。
  もともとは３径間の桁橋であったが、参道として太鼓橋風に組み直されている。江戸時代の桁橋の構造を知る上で貴重な遺産である。

6 旧壁沢川石橋（きゅうかべさわがわいしばし）

- 所在地／伊達郡川俣町飯坂（機織神社御前堂跡）
- 架橋年／明治22年（1889）
- 管理者／川俣町
- 橋長・幅員／L＝9.0m、W=5.85m（移築後3.5mに縮小）、アーチ幅7.2m、アーチ高約2m
- 沿革
  川俣町と伊達市月舘町を結ぶ街道整備の際に、信夫橋・松川橋を手がけた石工，布野宇太郎・源六兄弟により明治22年に建設された。
  その後大正２年の洪水で半分流出するが、翌大正３年に信達軽便鉄道の橋として使用するため修復・拡幅された。
  その後再び県道となり、昭和50年に拡幅工事により撤去されることとなるが、地元の強い要望により保存解体され神橋として移築。
  布野が手がけた信夫橋・松川橋と似た流麗なアーチ橋。

7 明道橋（みょうどうばし）

- 所在地／二本松市東新殿（二本松市道）
- 架橋年／不明（明治初期？）
- 管理者／二本松市
- 橋長・幅員／ L=5.1m,W=6.2m（うち石橋3.2m）
  アーチ幅3.6m、アーチ高2.2m
- 沿革
  国道349号の旧道にある。聞き取りによれば明治初期には存在したが、町史などに橋の歴史に関する記載はない。
  アーチは御影石の単アーチ、壁石は間知石積風。昭和の時代、上流側にコンクリート床版橋で拡幅されており、その際に石橋も補修されたと考えられ、目地にはモルタルが施工。
  次郎右衛門橋とも呼ばれているが、橋を施工した石工の名だという。

8 東根堰水路橋（ひがしねせきすいろきょう）

- 所在地／伊達市保原町（東根堰用水路）
- 架橋年／大正３年（1914）頃
- 管理者／東根堰土地改良区
- 橋長・幅員／ L=8.6m、W=2.7m（地覆内幅2mアーチ幅2.7m、アーチ高2.5m
- 沿革
  信夫発電所から伊達市梁川町、保原町の農業用水を導水する東根堰用水路の水路橋。東根堰の用水を東西に分水する大柳円筒分水の北側にある。
  1912年（明治45年）阿武隈川右岸箱崎地区からポンプにより揚水する愛宕疎水整備により着工、1914年に完成。
  石は進歩した加工技術により面取りされ、目地はモルタルで補強。壁石も布積みで高い精度で積まれ、石表面の風化はあるが孕み出し等もなく良好な状態で保全されている。

9 不動川水管橋（ふどうがわすいかんきょう）

- 所在地／会津若松市一箕町（戸ノ口堰用水路）
- 架橋年／不明（明治～大正期？）
- 管理者／戸ノ口堰土地改良区
- 橋長・幅員／ L=7.0m、W=3.2m
  アーチ径間4.0m、アーチ高2.0m
- 沿革
  猪苗代湖から会津若松市内に導水する戸ノ口用水の、飯盛山洞門の入口に架橋されている。
  1835年（天保６年）から会津藩主松平容敬公が行った戸ノ口堰の大改修の際に不動沢に架橋したとの記録があるが、この橋かは不明。
  壁石は布積みで、石材は安山岩（凝灰岩系）で柔らかく、表面の風化が進んでいる。
  昭和50年代の土地改良事業により補修され目地にはアーチ部も含めモルタルが詰められており、解体後後再構築されたとみられる。漏水も見られず現在も良好な状態。

「福島の石橋群」ができるまで

「福島県の石橋群」は、信州の高遠石工や九州の豊後石工、鹿児島石工などの県外の石工が地元の石工を指導して建設されたのが始まりです。この工事を通じ地元石工が石橋建設に必要な技術を得たことで、その後県内の石工が単独で石橋を造り上げていきますが、この間の歴史を振り返ってみます。

1　高遠石工の関わり

写真１

信州（長野県）の高遠藩は、石の産地であったことから、古くから石工職人が多く、中世頃からは本州各地で旅稼ぎを行っていました。福島県にも上杉景勝や保科正之が会津若松城主になったころから信州石工が往来するようになり、猪苗代町麓山神社の左右大臣像は、保科正之が高遠藩から連れてきた石工の作と伝えられています。寛永年間の二本松城石垣修理も高遠石工が担当したと言われています。

江戸時代には中通り地方にも高遠石工が往来するようになり、神社の鳥居や狛犬、仏像など多数の作品を残しています。福島市飯野町の住吉神社の鳥居（写真１）などを手掛けた花井染右衛門は、「福島の石橋群」の一つの大桂寺の石橋を建設しており、高遠石工の技術導入の貴重な実例となっています。また、江戸末期に脱藩し県南地方に移り住み、多くの寺社に狛犬の彫刻作品（写真２）を残した小松利平は有名で、その技術は養子の小松寅吉などの地元の石工に受け継がれました。

写真２

2　安積疎水開発における豊後石工の関わり

明治12年～16年にかけて行われた安積疎水開発では、水門や水路橋などの石造りの施設が多数建造されました。この時工事主任を務めた豊後（大分県）出身の南一郎平は、故郷の水路工事に石工として携わった豊後石工を呼び、猪苗代湖の十六橋水門、五百川の熱海眼鏡橋などを地元石工を指導しながら建設しました。

写真３

十六橋水門（写真３）は明治13年に完成し、16径間、橋長65mの大規模な石アーチ橋でしたが、その後大正２年に電動で開閉される新たな水門建設に伴い撤去されました。

3　三島通庸県令による鹿児島石工の関わり

「土木県令」と呼ばれた三島通庸は、明治15年に山形県知事から福島県知事に就任、会津三方道路をはじめとする県内の道路整備に努めました。

明治16年の洪水により、福島城下の入り口にあった木橋が流されると、三島は直ちに橋の建設を指示し、明治18年には当時としては破格の規模の13径間、橋長192.7mの石アーチ橋である「信夫橋」（写真４）が完成しました。この工事は山形県令時代から三島に仕えていた鹿児島の石工奥野忠蔵や技官の原口祐之らが監督し、川俣の布野源六や、三春の松本亀吉などの県内の石工により建設されましたが、残念ながらその後明治24年の洪水により破損し撤去され、その後木橋が架けられたのち、今のコンクリート製の信夫橋となりました。

写真４

県内の石工たちは同時期に建設された松川橋でも九州の先進的な石橋技術を学び、４年後には布野が地元の川俣町に壁沢川橋を架けるなど、その後は地元石工が独力で多数の石橋を県内に建設していきました。

これらの石橋は、多くが道路の改修などにより失われましたが、県北地方を中心に現在も多数が現存し、江戸時代から明治時代にかけて、全国各地からの様々な技術導入により発達した本県の土木技術の歴史を現代に伝える貴重な文化遺産のひとつとなっています。

現地見学会 / 11月18日(土)

13：00 福島駅西口バスターミナル集合、16：00 解散

行程　松川橋 → 広表のめがね橋 → 大桂寺の石橋 → 旧壁沢川石橋 → 甚念坊山２号橋 → 旧祓川橋（２台のバスに分乗し見学しますが、駐車場の関係で１台は逆のコースで回ります）

シンポジウム / 11月19日(日)

開場 12：30　開会 13：15　閉会 16：00

プログラム

1　主催者あいさつ　　福島の石橋群保存会会長　丹野 義明

2　来賓あいさつ　　福島市長　木幡　浩
国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所長　丸山 和基
福島県土木部長　曳地 利光

3　土木遺産認定経過報告　　福島の石橋群保存会顧問　相澤 広志

4　基調講演
「近代土木遺産の技術的及び歴史的価値」
日本大学工学部准教授　知野 泰明

講師紹介
新潟大学大学院博士課程卒業、専門は景観工学、土木史・国土形成史。
2007 年より日本大学准教授に就任、現在に至る。
福島県景観審議会委員など行政機関の各種委員を歴任、2023 年からは土木学会選奨土木遺産委員会委員長を務める。

休　憩（14：40～14：50）

5　パネルディスカッション
テーマ「石橋群が紡ぐ歴史・ひと・地域」

コーディネーター　日本大学准教授　知野 泰明
アドバイザー　国土交通省福島河川国道事務所長　丸山 和基
パネリスト　東北土木遺産研究所所長　後藤 光亀
歴史の道土木遺産萬世大路保存会会長　梅津 幸保
ふくしまけん街道交流会事務局　山口 裕子
福島市立第一中学校教諭　齊藤 まつみ
熊本県山都町教育委員会生涯学習課学芸員　大津山 恭子

国土交通省福島河川国道事務所長
丸山 和基

東北土木遺産研究所所長
後藤 光亀

歴史の道土木遺産萬世大路保存会会長
梅津 幸保

ふくしまけん街道交流会事務局
山口 裕子

福島市立第一中学校教諭
齊藤 まつみ

熊本県山都町教育委員会生涯学習課学芸員
大津山 恭子